# 公開研究会
# 琵琶湖における環境問題の普遍性と固有性
## ――資源論の視座から――

滋賀県立大学・名誉教授 里山学研究センター・客員研究員
秋山　道雄

### Ⅰ．はじめに

森のある大学 龍谷大学里山学研究センターは、2023年12月７日（木）に研究会を開催し、本研究センターの秋山道雄氏（滋賀県立大学・名誉教授 里山学研究センター・客員研究員）が「琵琶湖における環境問題の普遍性と固有性―資源論の視座から―」と題する報告をした。

### Ⅱ．概要

本研究会の概要は、次の通りである。

【日　時】2023年12月７日（木）15時15分～17時15分
【場　所】龍谷大学瀬田学舎９号館２階大会議室／ Zoom（対面・オンライン併用）
【スケジュール】

| 内　容 | 報告者（敬称略） |
|---|---|
| 報告：「琵琶湖における環境問題の普遍性と固有性<br>―資源論の視座から―」 | 秋山道雄 |
| ディスカッション | 中川晃成（司会） |

### Ⅲ．報告内容

報告を始めにあたって、秋山氏は、生物多様性保全の方策について、場（琵琶湖沿岸域）と準拠枠（環境資源管理）を共有し、学際的研究による新たな方法論の探求と生物多様性問題の解明を通じて明らかにする旨の報告の趣旨を明示した。

報告内容として、まず、資源論をめぐる状況について、資源論の研究はアメリカを中心に行われ、日本では第二次世界大戦後に研究され始めたこと、①経済安定本部に設置された資源調査会の活動と②アメリカの「TVA事業」に関わったニューディーラーによる影響及びリリエンソールの著書『TVA』の影響によって資源論の骨格が形成されてきたこと、21世紀に入る前後から地理学・経済地理学以外の分野から資源論への接近がみられるようになったことを述べた。

次に、地理学における資源論について、戦前ではその議論がわずかであった一方で第二次世

界大戦後は地理的決定論への批判として登場し、その後、①社会問題としての資源問題、②現場の特殊性を重視する方法論、③国民に語りかける民衆重視の思想という資源論の共通項が見出されたこと、資源論には、個別の各論を一段抽象化したレベルで相対化することを通じて相互の「つながり」を想起させるという意義があることを説明した。

続けて、水研究と資源論について、日本は水資源研究＝水利研究という認識が強いが本来は水資源研究≒水利研究であり、この点から欧米の水資源研究の内容と日本の水利研究との間にはズレが生じていると指摘した。報告者が琵琶湖をはじめとした水環境の研究を水利研究（≒水資源研究）とどう接合させるかという課題に直面した際に、ジンマーマンの資源概念（「事物または物質に当てはまるのではなく、事物または物質の果たしうる機能、あるいはそれが貢献しうる働きに当てはまる」）を手掛かりに研究に向き合ってきたこと、研究活動を通して資源論の枠組みで水利研究（≒水資源研究）と水環境研究とを統合して考察できることを発見したこと等を示した。

さらに、琵琶湖における環境問題の普遍性と固有性について、普遍性は湖沼や水環境という面で他の湖沼や水環境と共通項が見出せる点や、全国一律の法制度の元で環境政策が展開されている点にあると指摘した。また、固有性は琵琶湖が古代湖であるがゆえに固有種が存在していることや近畿圏における水道水源となっていることが他の湖沼とは異なる琵琶湖の固有性であると指摘した。その上で、琵琶湖における環境問題は水質汚濁問題から生物多様性保全問題へとフェーズが変わってきた点について触れ、この問題は琵琶湖流域（琵琶湖＋沿岸域＋集水域）という観点から考えていかなければならないと述べた。生物多様性保全からみると、沿岸域の重要性を認識することがポイントであると指摘し、琵琶湖沿岸域の抱えている問題を象徴しているとして赤野井湾に着目した。

資源論から赤野井湾をみると、漁業者にとっては漁撈の場としての生産資源、農業者にとっては農業用水源としての生産資源となり、周辺住民・NPOの関係者にとっては、レクリエーションの場、環境学習や環境教育の場、地域のシンボルとしての存在価値がある環境資源となることを指摘した。そして、赤野井湾再生プロジェクトを通じた保全活動によって「知の交換」がされていることを強調した。

## Ⅳ．ディスカッション

ディスカッションは、中川晃成氏（龍谷大学先端理工学部・講師 里山学研究センター・副センター長）の司会のもと、資源論の本質に関わることや、資源論と琵琶湖を始めとした水資源研究、水利研究の実践との関係等といったことが参加者との間で議論された。

（報告：眞田 章午（里山学研究センター・研究補助員））